

三易由來記

下

口仁12

1595

2止

屬附學大田稻早
館書圖

寄第 一

經書

第 143 號

第 2 卷

出帶許不外館書此

三易由來記卷之下

大庭 平寫亂撰述

入門

駿河國

新庄道雄

武藏國

碧川好尚

常陸國

竹來道彦

同校

四 孔子晩而喜易序彖繫象說卦文言詁易章編三絶曰假我數年

若是我於易則彬彬矣

此第九條也。史記に孔子世家に採れる。抑孔子は晩而喜易
と云ふ説も。儒者の嫌ふ事なれど。信ふ然有しあつて。種々
思ひ合けり。事とも有て。其を先外より好める。礼容行事
を問ふむと周小適きて。夫子の門に入らるん。莊子天運篇

あして。創めて易を学ぶ。其易学は力に頼りて。天命を知れ
る義あるものと著し。其本編の記を如く。天命を知りて。易
学は本旨なり。此語は解して未だ喜ぶ。然る天命即天道
之故也。知此則知極其精而不惑。又不足言矣。云云。如し。益
人生不知易。偶筮其命得旅。請益於富。瞿氏曰。子有聖智而無
位。孔子泣而曰。天也。命也。鳳鳥不至。河無圖出。嗚呼。天命之也。
嘆訖而後停詠。礼止史削。五十究易作十翼也。と言ひ。其易法
を師於姬昌。法且とも見えたり。此全書を武英殿の聚珍板
此説を始めて古説と思へり。偶筮其命。人各々本命行年の天命を定れる也。偶小時命に爰

と知む。為小筮や立れる義あること。既小本編の委曲する
多考え合ふなり。抑旅卦は所住を去て處はる驛旅の象な
る。其好む礼樂はも聖智のうとも位老き。東西南北の人
を。行ひ得はしき道なる由也。富瞿小問ふて之を解え其
天命は何とも為るなり。事と嘆じて。其より見を改めて。
礼書や讀とて停廢し。春秋は史削の止あり。五十は齡の
して。始めて易を究めて。十翼を作れる由あり。然れを史
曰。我欲載之。空言不如見之。行事之深。切著明也。有是史削
中就了。然る語は九説苑の孔子曰。成人之行。難乎情性之理。
通乎物類之變。知幽明之故。曉達氣之源。若此而可謂成人。既
知天道。行躬以仁義飾身。以礼樂。夫仁義礼樂。成人之行也。弱
神也。此は共小五十五而。知天命より。後は語を。然れを。あ

そ毎小習として其者ハ十翼とて本文ハ序象繫象說卦文言
と高尚小聞えたりと 十翼とて本文ハ序象繫象說卦文言
とある象傳上下繫辭上下象傳上下說卦文言八傳小序
卦雜卦二篇を加えて十翼と云ふ史記曰え序卦雜卦の
名字漏り序と云。孔子以前より在りる。右の傳等と據ひ
聚め序次を立て十傳と爲る由あり。漢書藝文志ハ易經
注ハ上下經及十翼故十二篇と云ハ孔穎達ハ正義ハ十翼
者上象一下象二上象三下象四上繫五下繫六文言七說卦
八序卦九雜卦十とあり此ハ然る言あり然る言あり揚雄曰安犧氏
繇絲天地經以八卦大王附六爻孔子錯其象而系其辭と云
繇絲天地經以下の然るに隋志ハ孔子爲象象繫辭文言序卦說
卦雜卦と記し今ハ坤鑿度あり孔子作十翼と云ハ諸書ハ
十翼ハ文と引用するに孔子曰あると云ふを悉く誤る序と

云るを豈うち任せて作と云むや。然れと漢以來難ハ十翼
を天く唯あり孔子の作ありと云ふハ歐陽脩が周易童子
子問と伊藤長風が說易私說とあり然れと其まな未だ片
さる說ハ多し其數を備えり序次を爲むと喜み誦ある
下論ふを見らばし。備えり序次を爲むと喜み誦ある
ハ韋編と三才三絶續也。心ハ應ふ如く。序と爲得たり
し故ハ。あは我ハ數年の假りて是の如く勞きあり我ハ
易學ハ於て彬々たりむと。意ハ快あり略由ハ嘆きしあり
孔子ハ易を叙れり是く勞き事ハ論語緯比考識ハ也
孔子誦易韋編三絶續也三折漆書三滅也凡見たり史記
ハ文ハ是に依りてハの坤鑿度ハ孔子の易學ハ姤昌を師
とす。姤旦ハ法と云。と有るに就て思ふに。尚書ハ孔安國ハ
序ハ。古者伏羲氏之。王天下也。始畫八卦。八卦之說謂之八廣

求其義也。先君孔子生於周末。讀易道以黜八索。一有八索
也。本編の云々如く。本命行年卦八卦。各々年々八索とて。
八々六十四卦と成る。それ六十四卦また毎年の八節の更
化して六十有四と成る古法なり。その此文の正義は易
八十四爻皆出於八卦。就八卦求其理。則萬有一千五百二十
策。天下之事得故讀之。索非一索。再索而已。とある。知
然るや。孔子の姤昌父子が六爻判斷の周易を讀して。
八索の古法を廢黜する由なり。其を論語に信して云々
好むと語りて語を有れと。其性元々古道な好まむ。常道
を好む學僻なれむ。此を學ぶまじき非事なり。と。かみ
問る人々後し。けり其序次なりと云ふ。十翼の中。象傳

上下を姤昌が彖辭の傳。象傳上下を姤且が爻辭の傳ある
が。其象爻の辭と凡に採用をふじき上る。覺て其傳を云ふ
も更なれど。彼象傳は實に孔子が自作のやと思ふ由なり。
其に大哉乾元萬物資始。至哉坤元萬物莫大也。様の讀語
多き。讀易道と有るに叶ひ。可也湯武らは擬聖の。善と誣
りて説き有るが。此人の學風は合をれり。湯武らも善を
善と傳ふ。渠も君を敬りし君を弑する事や。天應
人。云々類を云ふ。ある論語を始め諸書は此人の成湯文
武らに善を誣る語は數あるに暇。次は象傳上下。是ま
九象傳と同く氣ある。孔子の作するは。所思の事の中。
大衆とて乾。天行。乾君子以自強不息と云ひ。坤。地勢坤。

君子以厚德載物と云ふ類の六十四章を疑はく大吳氏以
來は象辭を轉傳口誦し來れり。いと古き世や筆記を依
物あり。其を姫昌が象辭を危厲するとして似る意の善く諱
の通えり。其を姫昌の文を易の文と解くが如き類の實直
平和の文あり。以て古象辭の遺訓なり。こと先所知らり。
いと其由を。まが彼六十四章を大衆と云ふは。一卦の大衆
や云ふ文あり。故の名あり。に。謂ゆる象傳中の錯出する由
來。いふふと。姫昌の象辭を作して。卦々の下
載し。姫旦の文辭を作して。後を。其周易のみを用ひし故
に。大衆の辭は古あり。自然の序れり。孔子の象傳二
下篇を作する時。其を惜しめて。彼象傳の每首章の標し

出を依物と見えたり。然るに彼象傳は又辭を叙する傳
りし。其有章の標出する大衆の文を叙く象と稱ひ來り。然
るに其に隸する故の名と聞ゆる。と思ひ合はざる。然
りて此大衆の孔子以前に在りし古主なりと云ふ事。何を
以て知る。と云ふ。春秋昭公二年の左傳に。晋の韓宣子
魯に來聘する時。其事を載して。觀書於大史氏。見易象曰。
吾乃知周公之徳。予周之所以王也。と有る。易象を乃この大
衆の文を見たり。義あり。今の語に。姫旦が文辭。及び其傳
を。謂ふふ。非也。但し是語の吾乃知周公之徳。予周之所以
あり。皆修齊治平の道あり。以て周の王たる所以を。知
る。其あり。此を周公の作と思ふ。標あるを非なり。
然れば伊藤長胤の周易通解の。今と相似たる説を出し

て。右の左傳を引き。孔子時。年十歲象之作蓋在孔子之先矣
と云ふ。信然。然る説あり。先儒以後。十翼。孔子之作。故以韓宣
子所觀象者爲指。又韓然。又韓之流行。諸國久矣。列國之士
大夫。皆能言。載在左氏傳。晉獻公嫁伯姬。于秦。史蘇占之。引
婦妹亡羊之緯。僖十五年。秦卜偃然。崇伯將納。王曰。公用亨于
天子。之身也。襄二十五年。齊崔武子筮取棠姜。陳文子引。困。困
于石。掘于燕。燕之緯。可見。又韓於諸國。久矣。何得謂然。此
到。宣子始觀。又載。云。是。是。通。之。然。此
大衆辭。か。周易。何。後。物。ときふ。夫。達。以
新の物。ある。其。何。以。云。本編。註。如。象
字。と。南越の大獸。名。ある。想像の義。の假借。を。用。て。
八卦の作れる。當。草。意。う。め。せ。よう。用。ハ。カ。と。所。思。め。文
字。あれ。と。象。は。然。ら。も。此。と。疑。あ。く。姫。昌。の。其。作。れ。る。卦。辭。ハ

名。の。始。め。て。假。借。る。名。と。聞。え。た。也。然。云。周易。上。下。篇。の。象。辭
あり。外。の。形容。の。擬。も。事。形。と。に。象。と。云。る。名。を。一。つ。た。右
あり。无。き。と。象。字。を。今。に。至。る。まで。晉。福。く。形容。の。象。の。用。ひ
來。る。を。以。て。見。抑。象。字。を。説。文。の。象。死。走。也。从。生。以。象。省。韻
會。の。徐。曰。象。形。繫。辭。曰。象。者。材。也。謂。卦。中。剛。柔。之。材。陸。氏。曰。象
者。斷。也。毛。氏。曰。以。互。彙。頭。也。象。其。銳。而。上。見。と。見。え。楊。慎。の。外
集。の。九。彙。亦。曰。象。犀。狀。如。犀。而。小。角。善。知。吉凶。之。文。廣。有。之。上。人
名。曰。稀。神。犀。形。獨。角。知。幾。知。祥。是。則。象。者。取。其。幾。也。と。言。り。た。
留。青。曰。礼。の。象。者。修。象。之。説。死。類。也。頭。銳。而。上。見。故。象。居。卦。又
之。首。象。之。斷。然。不。疑。故。象。能。決。斷。一。卦。之。體。或。曰。象。多。角。犀。形。
小。獨。角。善。知。吉凶。故。曰。稀。是。等。の。説。の。依。れ。る。由。來。の。大。象。小
象。字。を。假。借。せ。る。より。思。ひ。着。て。此。獸。の。名。を。借。り。て。已。う。新

作を辞の名と爲らふなり。然れど假令象と名々たる
も。語こそ草々。それ卦施乃大體や云ふ。即象辞あるが故
也。繫辭傳の如く。最者言乎象者也。と見えたり。是の如く大
象の象辞なり。古き明證ありきや。長風う通解の如く。子謂象
別就上下二象既竟如天行健地勢坤然則象之作其然然
於象之後乎と云ふは深く右の謂を思ふべきあり。然り
は大象の殷世の辞あること言ふ。尚夫より以前の物
なり。其を何ぞ以て云はれ。殷の用たる煇藏易の卦名を
取ふ云ふ如く。今の卦名とハ大抵異あれ。大象辞も殷
世の記さるなり。其卦名を用ふはきに然らぬ。決めて夏
世の筆記あり。上は第四條の引くる路史の説は連山之文
禹代之作煇藏之文湯代之作周易之文

之作と有る。其七夏の用たる連山易也。今其卦名と全
思ひ合はれし。同しきに。大象の卦名も。その用ひたるを以て著明あるが
上。その六十四章の文。君や大人と稱し。或は君子と稱
し。或は后とも先王とも稱するを以て。疑なく夏世の筆記
と推量られ。大象の大凡そ六十有四章の中は七章を
し。一章は大人と稱する。其餘の五十四章はみ。然るに君
子と云ふ大人と云ふ。亦縣太古傳の云ふ如く。皇國の故
實あり起る。大昊氏の嘗昔より。王侯の通稱の云ふ如く。
言ふれ。大象辞の口授ありし間。君子も大人ともを
誦し傳ふるむ。夏世も後。先王后ありと云ふ語とを交
。ハ

友講習と有るに本然なる語あり。然るに元ハ恒ハ悦懌ヲ
をまゝと爲す卦ハ三ノ效ハて享ビて時ハ之ヲ習ふと悦
ハ其學ハよりて學友ハ其遠方より訪來て講習するも樂
なり又然し其遠方より訪來て講習するも樂なり此
學友等ノ事ヲ都て知らざる我ヲ知る人光ヲを恒問せさ
るも亦君子の風ハ不リ免ヤと兎卦の象ヲ觀し其辭ヲ玩
味て自ら寓意せる語ハうき見也人ハ字習免て思ふ所
此ヲ始めと爲て論語中ハ此ハ信ヲ言ハ得たりと所
思也語ハも熟視レバ大象ハ辭ヲ敷演し或ハ翻案して
云る半ヲ過す也。此ハ一以貫之ヲ示し。その第一義ト云
る仁ト云ふハ乾坤二卦の大象より説出たる物なり。是ハ
易ハ五十以學易可以無大過矣ト云ハ晩年して易ヲ喜シ
章編ヲ三絶し。鐵槌ヲ三折せりと云ハ説ハ其然るを明
す

と思ふ所也。論語中ハ孔子ハ語と云ハ大象ハ辭ヲ敷演
易事ハ有レト所使ク煩々レを別ハ古易大象傳ト
云ハ物ヲ著クして其每章ハ注ハ引出たるを見る也
第二十卷曰篇ハ終章有る。不知命無以君子也ト云ハ語
也。澤水困ハ大象也。澤无水困君子以致命遂志ト有るに本
然なる語也。知命ハ易學ハ第一義なり。其そのハ陳蔡
問也。困厄する時の様也。知命ハ此時ハ孔子ハ亦窮
ト有ヤト問答する君子困る窮乏小人窮をれは是ハ溢
ト云ハ語ヲ思ふべし既ハ能ハる君子ハ許たり然て此
命ヲ致メ五十ハして天命ヲ知レハ驗ハ有ル也然レ
此語ヲ終章ハ出シ。首章ハ兎澤の大象ハ批レる講習ハ語
ヲ出せりと云ハ道ヲ學ぶと講習ハ始なりて。知命ハ終る義

字明せる由て。論語は撰者不識る知らずと。能くも孔子が
志學より成學までを。窺ひ識れり。撰音なり。論語の撰
曾参らり。門人の撰と云ふ或ハ。閔損が弟子の撰なり。是
と云ふ本種々其説等あれど皆筆ありぬ。説等ありて
論語ある語と云ふ。多く大衆の辞ふ本なり。と言ふ事。古
今學者の却ち知れる事あり。始めて言ひ出され。今
忽ち諸人る百あり。却て之を辨るなり。大衆辞と
論語と相似るは。其の孔子は語ある故なりと言ふも有
む。然れど其説立か。由あり。其ハ。衆辞又辞を。恒昌父
子の作めて。互に異義あり。其を叙する衆傳衆傳と。其の孔
子に作めて。本辞と其義の違を。げ。中。唯の。大衆辞は

み。衆又其辞及び其傳と義理の相違せるが。多あり。是は
其古辞ある明證あり。今其相辭の事なり。一云。云
君子以。下。安民。有。是。安。重。其。卦。の。大。衆。の。山。附。於。地。剥
也。衆。衆。則。也。不。利。有。所。往。と。有。り。吉。卦。の。非。を。ま。乃。履。卦。の
大。衆。に。上。天。下。沢。履。君。子。以。衆。上。下。是。民。志。と。有。り。是。事。と。礼
を。説。乃。る。に。衆。辞。あり。履。衆。履。則。也。云。乃。れ。不。危。厲。の。慮。あ
る。卦。あり。此。衆。辞。衆。と。衆。と。其。旨。は。異。なり。今。そ。く。奉。る。に。暇
何。り。と。云。乃。衆。辞。之。辞。を。更。あり。其。衆。傳。又。傳。と。云。乃。吉。凶。相
問。と。云。乃。大。衆。の。六。十。四。章。の。人。事。の。推。て。教。ふ。事。に
善。道。を。以。し。一。も。不。善。の。辭。を。有。る。者。あり。是。の。み。易。の。問。う
る。事。れ。く。乃。衆。傳。と。同。作。あり。斯。後。乃。顧。炎。武。の。日。知
録。を。見。れ。る。其。一。卷。の。孔。子。論。易。見。於。論。語。者。二。章。而。已。曰。如
我。數。年。五。十。以。學。易。可。以。無。大。過。矣。曰。南。人。有。言。曰。人。而。無。恒
不。可。以。作。巫。醫。善。夫。不。恒。其。德。或。承。之。羞。子。曰。不。占。而。已。矣。云

意を人として憚るの心ある者こそ巫醫を作らざるを、常人
は言ふに能く然る言ひなり其の恒卦の九四の辭、其徳を恒
に保ちて居る者なり或る言ひに蓋を承くことと云ふと證して記者於
夫子學易之言、而即繼之曰、子所雅言、詩書執礼皆雅言也。是
知孔子平日不言易、而其言詩書執礼者皆言易也。人苟猶乎
詩書執礼之常而不越焉、則自天祐之吉无不利矣。大衆所言
凡其體之自施之於政者、無非周易之事。以上の説とも古今
に信し然る言ひなり此より以下も繫辭傳を直に孔子の作
と思ふに然る言ひなり其の餘をみるに理もあつて説くは作
了然と天の道を得聞也。夫子之言文章可得聞
也。言性天道不可得聞也。夫子之言文章可得聞
るは皆易道を深理に渉る事あり。故其作繫辭傳於悔吝无
咎之言、持緯之高然、辭本於爻、故曰君子居則觀其象而玩其

辭、觀之者、我玩之者、深矣。其所以與民同患者、必於此。緯著之
故曰聖人之情見乎辭。又曰出入以度、无有節。如臨父母、是
孔子之易也。云へん。予か意を得たる説ある。今以要
ある語とを撮りて抄し。此の語を長らく通説及び
雅言、詩書執礼、乃曰興於詩、立於礼、成於樂、此夫子平日所為
數年則其事似、綴觀十翼所言、易之於人道、極其深奥、極其切
近、不可斯須離、非詩書之可也。此其旨不同、吾寧擇繫辭而從
論語と云ふと論語より中由第一の書と思ふし、維復子
武う説ふに此を從ふも生涯の意と爲る故ありと顧炎
儒者より此を論るに精あるを其餘は了繫辭と云ふ以下の諸
は大概論らふに足るをいし。漢以來宋に至るまで異論
篇より。孔子の作れりと云ふこと。

間者在焉。未必无益於學也。と云ふ。信然と言ね。此大に
て漢初の易大傳と云ふ。と謂ふ。史記の自序の易大傳天
下下致而而慮同。歸而殊途。と有る。王義山張景云。謂易繫辭
也。と云ふ。説小の此の謂ひて。うく言ひ。經典教文。の易大史公論
六家要旨。の此の謂ひ。之易大傳。班固謂孔子晚而好易。讀之。年
編三絶。而為之傳。傳即十翼也。と云ふ。所漢郊祀志。の易大史公
傳。の易大傳。曰。誦神者。殃及三世。と云ふ。語。有久然。と云ふ。此
傳。の見え。と抑繫辭傳。の。実。ゆ。と。名。の遺説。餘論。を聚めし
物にて。全く。孔子の語。の非。支。中。の。大。是。以來。の。古。易。の。説
あり。姬昌以來の周易の説有り。珠玉砂礫混淆して。其文の
序次いと複雑なり。孔子その遺説を集めて。序を調へ。む
と欲せ。物。の。ら。彼。家。象。二。傳。の。依。の。事。と。力。を。用。ひ。て。此。傳
をい。ま。と。序。次。を。為。畢。さ。す。し。て。其。門。業。の。後。人。そ。の。草。稿。の

言加。り。あ。ど。して。世。の。傳。へ。し。物。の。り。是。を。以。て。其。大。中。の。顔
氏。之。子。が。と。言。ひ。子。曰。と。云。ふ。條。も。多。う。り。然。れ。を。繫。辭。傳。と。
元。より。其。新。古。の。取。合。あ。く。て。叶。ふ。也。書。の。り。説。易。の。説。の。子
其。殆。庶。幾。乎。有。不。善。未。嘗。不。知。之。未。嘗。復。行。也。此。非。孔。子。之
言。也。礼。の。前。子。名。君。前。臣。名。弟。子。之。於。師。亦。然。故。夫。子。之。呼。諸
弟子。必。稱。其。名。曰。參。曰。子。貢。曰。子。有。曰。子。路。而。未。嘗。稱。其。字。亦。未。嘗。稱
其。氏。之。子。若。使。系。辭。為。夫。子。之。作。耶。必。不。稱。顔。子。之。子。史。記。載
孔子。之。言。曰。顔。氏。之。子。使。爾。多。財。吾。要。為。兩。室。者。亦。依。系。辭。而。會
其。福。焉。耳。不。足。技。也。且。翼。易。而。終。其。門。人。之。德。七。可。疑。也。蓋。我
國。儒。者。習。聞。顔。子。之。德。章。合。回。也。傷。空。及。不。戴。過。等。語。以。登。明
不。遠。復。之。義。耳。と。云。ふ。通。解。の。叙。例。の。十。翼。之。興。或。先。於。孔。子
或。後。於。孔。子。後。也。漢。合。以。所。經。耳。と。も。言。ふ。又。其。自。語。に。子。曰。と
云。ふ。語。の。通。解。を。是。を。以。て。説。者。或。は。此。を。講。師。の。言。と。し。或。は
子。を。男。子。の。通。解。を。是。を。以。て。説。者。或。は。此。を。講。師。の。言。と。し。或。は
免。り。然。れ。と。其。の。上。件。は。次。の。文。を。傳。も。長。胤。も。云。ふ。如。く。有
謂。を。思。ふ。が。と。非。説。ある。次。の。文。を。傳。も。長。胤。も。云。ふ。如。く。有

章也。元者善之長也。故曰乾元亨利貞。と云。すで六十四
字。元傳ある。穆姜の語なり。斯で又辭を解し畢たる後。小
乾元者始而亨者也。云々。雲行西施天下平也。と云。ふ六十六
字あり。此又氣辭と同音なり。本これ文言首章の錯簡あり。
是を以て元者善之長也の章と。其音自然ら相年盾せ
り。然れを元者善之長也。と云。首章を。後來に換入れり。と
明りし。歐陽修も童子問わし。早く首章の元者善之長也
有五年而孔子始生又數十年。而始贊易然則四德非乾之德
文意不為孔子之言矣。と云。るも然る言あり。然る言あり。又
ある是より思ふに。此三易有る。以来に古説で。孔
子の集記するが中。後未より其門葉の徒ある。孔子の遺

説。より左傳中の語をも加えて。撰次せる物なり。事疑れし。
然る童子問わ。首章の元者善之長也。云々。其語を以て。又
言を一向に孔子以前に物なり。と云。説を委りたり。又。また同書
或謂左氏之傳春秋也。竊取孔子之言。以之。其後。穆姜之説。是左
氏之過也。然乎。曰。不然。彼左氏者。胡為而傳春秋。豈不欲其書
之信哉。也。乃以孔子晚而所著之書。為孔子未生之前之説。
也。此雖甚愚者。之。不為也。云々。と云。る言あり。此説を能く叶
り。次で説卦傳を。隋の經籍志に。秦焚書。周易獨以卜筮得存。
唯失説卦三篇。後河内女子得之。と有れど。今唯一篇あり。其
をら玉璽相半して。全篇を成終りて用ひ難き物なり。清の
輯り易の帖に。説卦在漢時已亡。至孝宣時。河内女子墜老屋
得之。更後漢書。其解又得。凡卦逸者三十有。今諸家所傳
則皆逸也。此非可意造者。故朱氏本義已補入。其採用をべ
荀氏集解。于説卦傳下。と云。る言あり。思ふに。合はる。其採用をべ
〇十五

博士官ありぬ者の。詩書を藏せざる者取て焼しめ。留藥ト
是種樹の書にみえたる。斯く其禁を犯せし儒者四百六十
餘人あり。生ずるあり坑に埋めて。殺せしと有る時字云ふ。漢書
林傳師古に注し。其坑の所より埋めたる事と委しく見え
たり。始皇は此等をして坑に埋めし。其の事と委しく見え
たり。其の事と委しく見えたり。其の事と委しく見えたり。
西籍既論し。云ふを見る所し。けり。商瞿より。史記漢書
ゆえ。つゝ孔子に易傳を受たりと有る。易緯坤鑿度の傳
より。此と懸く異にして。前条に注したる如く。孔子生ず。易
偶筮。其命得。旅請益於商瞿。曰。子有聖智而無位。孔子泣而曰。
天也。命也。鳳鳥不來。河無圖至。嗚呼。天命之也。云々。と有る。
是より後。五十に於て。易を究めたる由を載せし。易

學ぶ於て。商瞿却て孔子より先進するものと云ふ。史記
や易緯と其説は是非を決め難し。故その二方々考ふるに。
先史記を捨て易緯を取む。商瞿を孔子に易學を傳へ
る師ありと有る。弟子の非ざるや。強ひて其弟子傳へ出
でると言ふ。其の史記に孔子世家に弟子蓋三千焉。身
著者六藝。通者七十有二人。と有る。と三十人。と史
記然るに。後弟子列傳に三十五人。と有る。又史記に
書傳と云ふ。能く視れた。顔路公伯僚と始め。弟子ありぬ
者も數人有る。商瞿も其中に入らる。總て二十人。と史
記に。後水也。名字あり。其下。季也。四十二人。と史記に。
史記に。不見書傳とて。其名字のみ列せし。然るに。家語の
七十二弟子解。史記に。弟子傳を反する事疑ひ。元れ。人
名互に出入あり。史記に。疑えし。思ひ。公伯僚。類を
て省く。然れ。史記の弟子傳を強て七十餘人の數を得
む。とて。謾り。諸書を拾ひ。集めたる。名あり。有る。然れ

を商瞿と云ふ其の易学の師ありしと弟子列ね取りれたる
或は知るなり其の易学の師ありしと弟子列ね取りれたる
し後の文翁孔廟同と云ふ物あり林放蘧伯玉を入れたる
十二人は教を合せたるを思ふ所なり三千の弟子有
あむに七十二人なり然し其の事缺るるを非ざるの抑三千と
云ふ数と宮女三千威儀三千あると云ふ類ひに千の天教を
云ふ時語七十有二と云ふ数あるを年中の七十二侯
配するなり起りて五十を多く過ぎるを多く足さる数
云ふ時語七十有二と云ふ数あるを年中の七十二侯
あむに七十有二と云ふ数あるを年中の七十二侯
國の周流するに伊尹が湯の七十二説と云ふ或は漢高祖
股に七十有二と云ふ数あるを年中の七十二侯
人なり有るに七十有二と云ふ数あるを年中の七十二侯
云むに七十有二と云ふ数あるを年中の七十二侯
と云ふに七十有二と云ふ数あるを年中の七十二侯
を林放公伯僚易の事なり拾ひ收めて蘧伯玉七十有
や季康の事なり可笑き事なりむや然れを商瞿と弟子
云ふことと疑ふはた或は今本文ある史記の説を助けて
しき事なり

易緯と和會して説を為さむに。孔子は易学を。商瞿より
此後進み。此学の入たる頃と云ふ。益々商瞿の請ふる事
有る也。固より師徳秀才相兼ねたる人なる故也。其晩学の概
み韋編三絶鐵撻三折して大なる学び。終に却て商瞿の
其道を傳ふる計その精学に至る事と云む。其の師は知
弟子は能く知れる有り。却て其事弟子より其師に傳
ふる類ひと有る事なり。人を知るに其本弟子より
習ひ得て後より却て其道に精く成りて其弟子に教
を授けず。事なり。故に今を我より身然る事なり。思
ふ相しむ。右二説あり。見む人。擇ひて用ふ所なり。今人
情の適をむ。必其後の説なるなり。然るに此考は當り
ある。十翼の辭は孔子の序なり。編と。商瞿の受てを已

か説ふ所加ふし故也。子曰あはれと云ふ語は顔氏之子あはれと云ふ語も有る。此は後人好不能く考ふなり。家語の七十子篇に傳ふ所は、好易孔子傳之、志焉、焉あはれと云ふ此説も傳ふ所は、正しく志と云ふ十翼あはれと云ふなり。此説も傳ふ所は、傳書の經籍志に孔子は十翼を爲れる事を記し畢て。子夏爲之傳と云ふ所説を記て。周易二卷ト子夏傳殘缺梁六卷と云ふなり。然れど漢書の藝文志に此目あり。後傳する十卷は偽書なる由也。古人既く辨たり。子夏易傳漢志無、隋志始有、子夏易二卷、景文總目曰、此書篇第略依王弼式、決非子夏之文、其言近而不篤、然學者尚異、頗傳習之、晁子止公武讀書志曰、景迂云、張孤、偽依陳直齋曰、隋唐時久殘缺、宋安得、有十卷、陸氏叙文所引、隋子夏易傳、今本皆無之、豈直非漢世書、依非隋唐之書、抑子夏を孔門の謂ふ、十哲の一人なり。

ト商字子夏と云ひし人なり。此人の易學を傳ふしと云ふと。諱ある所見れし。列向説苑の敬慎篇に孔子読易至於損益則喟然而歎子夏避席而問曰夫子何爲歎孔子曰夫自損者益自益者缺吾是以歎也云々として損益は卦象に托して學者は損益の義を訓ずしものなり。子夏曰善請終身誦之と云ふ事は載れれし。此も易傳を受たりと云ふ計なり。事少あらむ題を以て史記の弟子傳に載し。其事を載せし。其索隱に子夏文字義於四科序詩傳易云孔子哀詔執轡と有れど傳易の事と詳あらぬ事なり。孔子哀詔執轡篇に子夏問於孔子曰商聞易之生人及萬物鳥獸昆虫各有奇偶氣分不同云々として是理を述て敢問其然乎と云ふに孔

子答曰。然。吾昔聞諸。亦如汝之言。と云へる説ありて。
易の精しき趣あり。此を大戴礼の地に。孔子の語ありて。
子夏の非也。凡て今傳する孔子の語と礼記の諸篇及び
説とを或は他書よりとれり。孔子の語を拾ひて。魏の王肅が偽
作たる書あり。此説を大戴礼と取りて。翻案する説ありや
む。惜しく。彼此を推て考ふるに。子夏が易を傳せりと云
ふ説を。商瞿の事實を認るゝべし。其七商瞿字子
木と云ふ。卜商字子夏と云ふ名字の。相似たるを思
ふべきなり。

〔五〕漢初傳易者有田何。何授丁寬。寬授田王孫。王孫授沛人施讎。東
漢孟喜。邳邪。梁丘賀。由是有施孟梁丘之學。又有東郡梁丘自云。

受易於梁丘。焦延壽別為京氏學。嘗立後器。

此第十一條也。隋書の經籍志を採る。然るに此をみず。漢
書の地に説あり。其の儒林傳に。漢興。田何授東武王同子
中。雒陽周王孫。丁寬。齊服生。皆著易傳數篇。師古曰。田生授王
生。四人而四人皆著易傳也。子中。王同。字也。藝文志。周氏易
傳二篇の註。田王孫也。服氏二篇の註。田王孫也。周氏易
傳。二人。服氏。王孫。二篇の註。田王孫也。同授。淄川楊何。字叔元。
元光中。徵為太中大夫。藝文志。楊子二篇の註。田王孫也。
至。城陽相。師古曰。姓。廣川。孟。但為太子門大夫。魯。周霸。莒。衡胡。
師古曰。莒人。臨淄。至父。偃。皆以易至大官。要言易者。田何。
史記の儒林傳。凡同説あり。終めを要言易者。田何。
史記の儒林傳。凡同説あり。終めを要言易者。田何。

梁人也。從田何受易精學成東歸何謂門人曰易以東矣。師
其法然以去寬至雒陽復從周王孫受古義。師周氏傳作易說
三萬言訓故率大誼而已。師古曰故謂經之旨趣也。它皆類此。今小章句是也。寬
授同郡田王孫王孫授施讐孟喜梁丘賀繇是易有施孟梁丘
之學。師古曰繇字施讐字長卿沛人也。為童子從田王孫受易
少府事多廼遣子臨門人張禹等從讐問讐自是不肯見賀固
請不得已乃授臨等於是賀薦讐結髮事師數十年賀不能及
讐并讐為博士云云。此小前其門中出者數人之最學也
○梁丘賀字長翁琅邪人也。以能心計為武騎從
○昭帝年子禹為郎中郎此間京房一也。復歷房本姓季推
子誅誅不遇ふまの記事有まに零に於て房本姓季推
律自足為京氏死時年四十一。儒林傳云京房受易梁人焦延
壽。延壽云嘗從孟喜問易會喜死房以為延壽易即孟氏學。翟
牧白生不皆皆曰非也。至成帝時劉向校書考易說以為諸易
家說皆祖田何揚何丁寬唯京氏為異。黨焦延壽獨得隱士之
說託之孟氏不相與同房以明災異得幸為石顯所譖誅自有
傳。京房列傳云云。房授東海殷嘉河東姚平。河南乘弘。皆
為郎博士。繇是易有京氏之學云云。藝文志云孟氏京房
房六十六篇五鹿充宗略說三篇京氏段易十二篇と有る註
云喜東海人為博士。即京房所從受易者也。見儒林傳及劉向
別錄云云。月里但し傳云云。殷嘉は了今也。小焦贛が易林。ま
と別錄云云。是れ事を知りて今也。小焦贛が易林。ま

○昭帝年子禹為郎中郎此間京房一也。復歷房本姓季推
子誅誅不遇ふまの記事有まに零に於て房本姓季推
律自足為京氏死時年四十一。儒林傳云京房受易梁人焦延
壽。延壽云嘗從孟喜問易會喜死房以為延壽易即孟氏學。翟
牧白生不皆皆曰非也。至成帝時劉向校書考易說以為諸易
家說皆祖田何揚何丁寬唯京氏為異。黨焦延壽獨得隱士之
說託之孟氏不相與同房以明災異得幸為石顯所譖誅自有
傳。京房列傳云云。房授東海殷嘉河東姚平。河南乘弘。皆
為郎博士。繇是易有京氏之學云云。藝文志云孟氏京房
房六十六篇五鹿充宗略說三篇京氏段易十二篇と有る註
云喜東海人為博士。即京房所從受易者也。見儒林傳及劉向
別錄云云。月里但し傳云云。殷嘉は了今也。小焦贛が易林。ま
と別錄云云。是れ事を知りて今也。小焦贛が易林。ま

九京房が易傳を稱ふ物傳より。其の漢魏叢書中より收れ
るが。易林のこゝに王謨が跋あり。焦贛易林四卷。通考本作十六
卷。凡六十四卦。每卦爻六十四。總四千九十六。皆為韻語。
与左氏所載漢書所載相類。今案延壽事具漢書儒林傳。及京
房傳中。而本傳及藝文志皆不言。若有易林故。或有疑為東漢
後人假託者。今按。此多顧炎武の言。知録。易林疑是東漢
易林。引左氏語。又往々用漢書中事云々。然考東觀漢記。
者明帝永平五年。以西上御雲臺。自為卦過。是以京氏易林。以
之錄曰。蠟封穴戶。天將下雨。沛然京房延壽父子。今書寒錄實
在。京林則在東漢之初。已用易林占驗。但未著其氏名耳。今易
林。易

太中大夫京房。受易房者。海川楊何。弟子也。師古曰。自別一京
為課史法者。或書京
誤耳。不當為京房。房出為齊郡太守。貨更事。田王孫宣帝時
聞京房為易。明末其門人得貨。々時為都司空。令以筮有應。誤
是。近幸為太中大夫。給事中。至少府。為人小心周密。上信重之。
年老終官云々。此其子及門人。其易學。抄也。○孟喜字
宜。其子及門人。其易學。抄也。○孟喜字
長御東海蘭陵人也。父號孟卿。師古曰。時人以卿。孟卿以礼經
多春秋。頗難。乃使喜從田王孫受易。林傳中。出々々。喜好自
稱。喜得易家。候舍易災。喜詐言。師田生。旦死時。枕喜傳。同門
梁丘賀。疏迫證明之。曰。田生絕於施讐。午中時。喜歸東海。安得
此事。師古曰。同門。師受者也。疏通。博士缺。衆人薦喜。上聞。改
猶分則也。證明。明其偽也。

師法遂不用喜々授同郡白光少子沛翟牧子况皆為博士
志中章句施孟梁丘氏各二篇○又有東郡京房云云京房
列傳云京房字君明東郡頓丘人也治易事梁人焦贛延壽
字贛師古曰延壽贛貧賤以好學得幸梁王王共其費用令極
意學既成為都史察舉補小黃令以候司先知姦邪盜賊不得
發師古曰以其常先知姦邪卒於小黃贛常曰得我道以亡身
者京生也其說長於災變分六十卦更直日用事以風雨寒暄
為候孟康曰分卦直日之法一爻主一月六十四卦為三百六
十餘卦震雷无妄坎為首伯監司之官所以震雷无妄坎
者是二至二分用事之日又是四時各專主之氣各卦
至時其占法各以其日觀其善惡也何古曰更上衡反各直占
驗房用之尤精好鍾律知音色初元四年以孝廉為郎云云○

□本文之按云京林之是山蟻封戶也文西將集と有之
語白や異あり何あり由あり若くは此段文より引くる
異本や本漢諸易家說皆祖田何惟京氏為異黨延壽獨得
隱士之說託之孟氏故藝文志易有孟氏京房諸篇而焦氏之
名反不著若隋唐志則固皆題焦贛易林也經義考云漢易惟
焦氏獨全而今叢書本祇作四卷則又不知孰為合并云と言
はる然る説ありら委ありき其の上の京房傳小地して焦
贛易法の趣を知り今の易林を考ふるに其言甚く異を
する此ハもと焦贛京房ら易法なり又周代より漢に至
るまで世々の古者傳来なり八索法の綴文を集めし書
なり東漢は頭より入て焦京ら易法と譌り来くる

か如し。あむ此段より一人は京房好むむうと云ふ方
て此易傳小。孔子曰。易有四易。一世二世為地易。三世四世為
人易。五世六世為大易。游魂歸魂為鬼易。鬼為繫爻。財為制爻。
天地為義爻。福德為寶爻。同氣為事爻。と有ふを。謂ふも世應
法にて。飛伏納甲五行の生死を以てする事也。後世謂ふ
斯易法は祖法なり。孔子の易を八索に糾けり。姬昌父子が
六爻古を用ひしこと。其變化の博のうた故也。斯の如き一
法は案し遺るもや。正傳の外に孟喜焦贛京房より。傍傳し
来れる物と見えたり。然れども此は大人の易の教也。日者
易あり。孔子の早く此易法を用ひし事を史記の仲尼弟子
列傳に西瞿年長無子其母為巫室孔子使之童瞿四

請ふ。孔子曰。無憂。瞿年四十後當有。五丈夫子。已而果然。と有
る。此の正義に中備云。魯人高瞿使向春。國瞿年四十。今後使
行遠路。思慮恐。無子。夫子正月與瞿。如莒。告曰。後有。五丈夫
子。更曰。何以知。子曰。卦遇大畜。艮之二世。九二甲寅木為也。
六五。而子水為應。世生外象。生亥未。亥未。艮。而子
五子。一子短命。願曰。何以知。之內象。是未。子。一艮變為二。醜
三易文。焉。於是。五子。一子短命。何以知。短命。他。以。故也。と有る
を視て。知る。然る。弟子傳ある。事實。孔子。家語。より見え
る。けり。次々傳ふ。論ふ。如く。隋より唐に至り。費氏の學大に
お用ひらる。唐の國京ハハ。其王闡注を立たる。其を學
業。此。二。ころ有る。筮ハハ京房易をを用たり。是を以て
六典大卜署ハハ。凡易之筮四十有九と有る。本注ハハ。用四十九
筮分而揲之。其變有四。一曰單爻。二曰折爻。三曰交爻。四曰重
爻。凡十八變。而或卦又視卦之八氣。王相曰。此胎沒休廢及飛

伏世應而使焉云々とある。是より後に新易天機あり。此の
因れり。事あるを古今の易學者流々として信じて其俗法に
從事して其俗法として知る者有るハ憐れむべき事なり。之
彼歎歎。詠易瑣言。大易聖人所以精義窮理。利用安身。以
崇德者也。操心制行。隨時處中。懼則思。思則慮。斷即是聖人
所以無大過者。舍此無餘術矣。若夫占天測地。按節數時。雖算
極微塵。虛歎精神。何所用之。蓋天下唯理可御。數數不能達理。
京房郭璞。非不精也。而按節用數。竟以滅身故。得其要一奇一
偶。而消息已具。不得其要。雖以焦贛之四千九十六。何益于成
敗之數哉。と云々。信然。然る事なり。

國漢初。又有東萊費直傳易。其本皆古字。詁曰古文易。以授琅邪王

瓚。瓚授沛人高相。相以授子康。及蘭陵毋將永。故費氏之學。行於
人間。而未得立。

此第十二條也。暗志に籠て。前條に連続せ。文あり。此徒の
事も。前漢の儒林傳に。費直字長翁。東萊人也。治易為郎。至單
父。令長於卦筮。亡章句。徒以彖象系辭。文言十篇。解說上下經。
琅邪王瓚能傳之。高相沛人也。治易。與費公同時。其學亦亡。章
句專說文。異自言出於了寔。傳相々授子康。及蘭陵毋將永。
康以明易為郎。永至豫章都尉。錄是易有。高氏學。高貴皆未嘗
立於學官。一見之。また藝文志に。漢興。田何傳之。訖于宣元。有
施孟梁丘高氏。列於學官。而民間有費高二家之說。漢宣元と云

元帝を以て貴高と云ふ費劉劉向以て中古文易經を授け施孟梁丘經
直と高相と云ふ事あり也或脱去也仲古曰中者天子之書
唯費氏之經與古文同と云ふ
此高相が子高康と云ひしを彼王莽の時東郡と云ふ
處に兵災が起る由を豫め私語して衆を惑はせしめ
谷を度て斬殺せしむる者なり抑て會易易學の長と
徒定異の事に坐して誅を受ける多うあるを他は災異をば
りて知れり已が身は災異をば豫め知ると能はざる
然れを諺に會易仰るが身は事を知らずと云ふ此等
事と云ふあり有るなり其を云ふ出たる京房の高康
見災異を語れる谷を受けりて牢獄に日るれ既ち命を失
むる爲るるを幸くして時を以て晋世に郭璞と云ふ人あり

其こと故に殺され此
を西に故に事あり
何傳易授丁寬丁寬授田王孫王孫授沛人施雠東海孟喜琅
邪梁丘賀由是易有施孟梁丘之學又東郡京房受易於梁丘
焦延壽別爲京氏學前條の本文を此と見たり又有東萊費直
傳易授琅邪王褒爲費氏學注云前書漢中本以古字號古文易
又沛人高相傳易授子康及蘭陵田將永爲高氏學施孟梁丘
京氏四家皆立博士費高二家未得立今の本文を此文を
取するなり然るに此文前書と云ふ旨れと前書の文を
此文を同うし由て其本の古文れりしと云ふなり
やうに其誤を受たりと云ふ費直と高相と云ふ元より別學なり
を隋志に費直より王環の傳へ王環より高相の傳へたり
○三八

と云ふは前後漢書を兼る
に見え、其の誤りあり

〔三〕後漢施孟梁丘京氏凡四家竝立而傳者甚衆陳元鄭衆皆傳費氏學馬融爲其傳以授鄭玄玄作易注荀爽又作易傳

此第十三條也隋書の經籍志に採れり其後漢に儒林傳易學者流に條の終りに連武中范升傳孟氏易以授楊政而陳元鄭衆皆傳費氏易其後馬融亦爲其傳融授鄭玄玄作易注荀爽又作易傳自是費氏興而京氏遂衰有るに批れり文に見えり
此は范楊陳鄭馬鄭荀七人の傳を述ぶ後漢書に載る中此馬融鄭玄ハ傑出の人あり鄭玄は馬融の弟子として十餘年從ひて其國に歸るむと爲す時に馬融を以て門生と爲す鄭玄今其國に歸東夷と唱ふ人なり七十四歳の春夢は孔子の夢に告ぐ起起余年歳在辰未年歳在巳と云ふは其の寤て

識を以て之を合せて當年に命終る事を知りて其年の六月に至りて七十四歳にて死に旅事なり其傳に見えり其共々しき事なり其儒林傳に注丹也傳孟氏易建武初爲博士作易通論七篇とあり建武は光武の帝なり其初爲博士作易通論七篇とあり建武は光武の帝なり其觀漢紀に馬融著易解頗生異說其著易傳據文象承應會易變化之義以十篇之文解說經意由是光武之言易者咸傳荀氏學而馬氏亦頗行於世と見え隋志に漢司空荀爽注十一卷荀爽九家注十卷と見え鄭玄注九卷と見え九家注は事大五海に序録に云荀爽九家集注十卷不知何人所集其後者以爲主故也其序有荀爽京房馬融鄭玄宋衷虞翻陸績姚信翟子元爲易注内又有張氏孔穎達正義易緯朱氏並不詳何人と有るなり知る所なり正義易緯乾鑿度云易一名而合三義鄭玄依此義作易贊及易論と有

る如く、鄭玄七緯書を好める人あり。乾鑿度を始め。易緯を
みあき注し作りて。其と玉海に。中興書目を引きて。易緯、
隋志八卷。鄭玄注。卷九。舊唐志九卷。宋均注。唐志宋哀注。
或引解經。今篇次異存。宋均李淑書目九卷。乾鑿度替覺四
通卦驗各二卷。辨終備。是類謀坤靈圖各一卷。今三館所藏乾
鑿度。通卦驗皆別出為一書。而易緯止有鄭氏注七卷。警覺四
第一辨終備第四是類謀第五乾元序制記第六坤靈圖第七
二卷三卷。無標目。載をる。如く。此今之全書傳を
カ抑るの易緯の書類も。周末世の孔子の易学に入るとし以
來。その傳受せる輩の次々記し傳へし内書と見えて。何

れも作者詳あらん。中孔語も多く有れと。信られぬ説を
録ふ多く。また中に正しき古説も少くある。熟く視て擇
び取るべき書類なり。曰く。列向父子七録。及班固の藝
文志。其各あるを以て。俗に固執ある儒者ある。一白の捨
て取る倫も有る。然るに緯書類して往々。其立る道の
破綻と見る説等の有る。故に。緯書あわれむ。其を物する
しき事あり。此を少く云ひ。通卦驗も宋文
の乾卦の又詳に鄭昌父子三人の履歷を繋ぐと有る類
を皆彼らが用意破綻と成る。秘説を書傳し文等
足る。以下列班固の此を採る。然るに其目録に緯
書類の目形さう故に其世に元とし。思ふに固陋心あり
共史遷の記し出する事。其班固より出する書目に見
えさる事跡の多うるを熟く視れば多くを緯書類に出

説等あるを史遷ト疾く見て採掇せしめ其を自序に
紀史記石室金匱之書ト云々ト知てく彼連山歸藏
書目凡藝文志に見えされと漢世に在りし事を
桓譚が新論を引きて論曰ト如くあるを思ひ合
辨めつぎぬト猶緯書類の事しト其に経籍志に
赤縣太古傳トの御外云トりきト其に経籍志に
魏代王肅王
弼竝ト為之注自是費氏大興高氏遂衰梁丘施氏高氏並亡於
西晉ト迄氏京氏有書無ト仲梁陳鄭玄王弼二注列於國學ト齊代
唯傳鄭義ト至隋王注盛行鄭學漫微今殆絶矣ト凡有之者
易の由来に就て是々ト後の事也ト歴史の志類を更け
諸書に多く見えト少く論を欲しき事ト有れどト易学先
生等既に辨ずるのみならず古易を以て用ふる
所為あるを是より筆を閑くトなるむ

